

御挨拶

浄土門主 伊藤 唯眞

日本における浄土教の歴史は、法然上人の二宗開立によって大きな転回を遂げ、新しい局面を開きました。古くは諸宗の間に付随しておこなわれ、その宗の教義において解明されてきたのであって、浄土教が一宗として独立していたわけではありません。この点、上人によって浄土宗が開かれ、浄土教が一宗として独立するに至ったことは、日本の仏教史上に大きな意義をもつものとして注目されます。

承安五年、上人が自行・化他ともに念仏に帰されてより起算して本年で浄土宗は開宗八百五十年を迎えることになりました。この節目に当って浄土宗教学院では、その間の歴史を回顧し、法然仏教を俯瞰することにより、単なる宗門史ではなく日本宗教史の中での位置づけを明確にしようと思図されたのでした。

この構想が第Ⅰ部「法然浄土教の源流」のテーマとなつて、浄土三部経典、三国の浄土教論疏など、また南都の

浄土教などに遡っています。第Ⅱ部では「浄土開宗の意義」を周辺の教学思潮から探り、立教開宗の意義に迫っています。第Ⅲ部のテーマは「列祖における宗祖」ですが、宗祖面授の弟子聖光が鎮西に教線を伸ばし、口授相伝の重みを伝え、良忠は鎌倉に進出し、京都に転じて鎮西派の正統化をもたらしました。次代の聖岡は宗戒宗脈を立て浄土宗を独立宗に高め、自宗の宗徒を養成した点でその功績は大であり、浄土宗中興の祖とされました。聖岡・聖聰により宗団意識は高揚化します。次の第Ⅳ部では浄土宗教団の成立と展開が眺望されています。入室弟子、上足等の門弟、念仏同朋衆、専修念仏宗の様態と法難、関東武者の往来と消息伝道、法然遺文と諸伝記、系図資料などが取り上げられ、都鄙の有名無名寺院の叢生などが視野に入っています。

思えば本論集は浄土宗の成立と教団史における広汎な諸研究の現在地点とそのレベルを明確に示し、かつ残された課題を予測せしめる重厚かつ貴重な論集であります。浄土宗開宗八百五十年の数多い諸事業のなか、その掉尾を飾るものでありましょう。立案編纂に当たられた浄土宗教学院の歴代御当局者及び執筆の諸研究者の学恩に満腔の敬意を表します。

浄土宗開宗八百五十年 令和六年一月二十五日に記す。